

三井のリフォーム 住生活研究所長 西田 恭子

トイレのリフォームあれこれ

「このように立て続けにトイレの改装に立ち会った。」

一つは和便器を洋便器に変えたいという要望だった。築一九年のお宅なのに和便器があるとは驚いたが、その理由は新築時に清潔感からご主人様が便座に座ることを嫌がり、二階のトイレは和便器にすると譲らなかったからだ。そういえば幼児体験から考えると、私の育ったころの家はみんな和便器だった。

日本の八百万（やおよろず）の神様の中に、「便所の神様」もいらつしやったというのを聞いたことがあるが、トイレにも靈魂が宿っていると信じられていたのだらう。地域によっては「この世とあの世とを行き来できる空間」と考えられ、祀られていたようだ。

ところが水洗便所に変わり、なおかつ和便器から洋便器になった今では、トイレは部屋の一部のような扱いになってきた。高齢化の介護対策としては、トイレの扉を取り払い、洗面所と一体にした広さを優先させるリフォームも多くなっている。

今回も和便器愛好家のご主人がご病気になり、入院体験を機に、和便器の体勢の不安定さと踏ん張りがきかないことで、改装する決心をされたのである。

便器の変更に伴い壁クロスも張り替え、壁にへこみを付けたニッチの飾り棚も付けた。クロスは正面をボイントクロスにすることで、今までとは違った空間となり、どうやらリフォームの威力を理解され、こんなに変わるなら玄関やリビングのクロスも変えたいと言いはじめている。

また、もともと洋便器だったのだが、新しい便器に交換され、便器の進化に驚いている方もいた。

ウォシュレット一体型便器にし、節水や暖房便座はもちろん、清掃性の良さやマッサージ機能付に感動されていた。

だが用を足し終わると勝手に水が流れる自動洗浄に、「こんなものはいらない！ やめてくれ！」とおしかりを受けた。どうやら女性だけでなく、男性も身支度には時間がかかるようだ。「まだ体勢が整っていないうちにジャーと水が流

れるのは不快だ」とのこと。大腸がん検査のための排便の時に、取ろうとしたら流れてしまったという笑えない話もあるという。

もちろん流れる時間変更や中止する機能も付いているので、セットを変えればいいだけのことなのだが、確かにいらないと思う機能が、初めから付いているのは費用的にも総合的にも無駄ということになる。家が自動洗浄のトイレの子供が、よその家で流さなかったという話も聞く。

その逆に、自動洗浄付きでない祖父母宅で、トイレの水を流し忘れることがあり、「おばあちゃん汚なあい！」と嫌がるお孫さんがいるとも……。

快適機能として謳われている物が、万民にとって快適とは限らない。

商品開発の難しさを感じる事例は多いが、リフォームは常に万民に対して行っているのではなく、個性が強い我が家をいかに快適に整えるかが使命だ。毎年のように更新されるカタログの性能評価表を読みこなすことも、仕事の一環だろ



西田恭子氏プロフィール＝一級建築士。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」所長。リフォーム設計の経験を活かし、新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。インテリア学会会員。日本建築家協会正会員。